
中世港湾都市遺跡の立地・環境に関する日韓比較研究

課題番号 15068203 [平成15年度～平成18年度]
19900104 [平成19年度]

平成15年度～平成19年度科学研究費補助金

(特定領域研究 [平成15年度～平成18年度]
特別研究促進費 [平成19年度])

研究成果報告書

平成20年3月

研究代表者 村井 章介

東京大学大学院人文社会系研究科教授

「中世港湾都市遺跡の立地・環境に関する日韓比較研究」目次

第一部 日韓港湾都市の研究	1
村井章介「港町のできる場所—日韓の比較から—」	2
宮武正登「中世港湾「佐志」の実相と構成—地方港湾遺跡の理解に向けて—」	17
鹿毛敏夫「中世都市の水辺空間—豊後府内と河原市・外港—」	54
高橋公明「済州島における連陸浦と『耽羅巡歴図』のなかの港」	72
孫 承喆「齋浦倭館の過去と現在」	83
第二部 中世日韓交流の諸相	89
榎本 渉「日宋・日元交通における高麗—仏教史料を素材として—」	90
李 領「14世紀の東アジアの国際情勢と倭寇—恭愍王15年（1366）の禁倭使節の派遣を中心に—」	107
李 領「〈庚寅年以降の倭寇〉と松浦党—禡王3年（1377）の倭寇を中心に—」	146
孫 承喆「『海東諸国紀』の来朝記事と朝聘応接紀の分析」	193
第三部 資料集	219
村井章介「鬱陵島関係史料集」	220
孫 承喆「安龍福関係史料（元禄九丙子年朝鮮舟着岸一卷之覚書）脱草」	244
調査記録	265

日宋・日元交通における高麗 —仏教史料を素材として—

榎本 涉

1 高麗の位置

日麗関係史は、すでに稲葉岩吉[稲葉 1935]・青山公亮[青山 1955]・森克己[森 1975ab]・李領[李 1998]氏などによって通史的な叙述が行なわれ、他にも多くの個別論文が発表されている。これらによって刀伊入寇事件後の外交交渉、文宗請医事件とその前後の日本商船の高麗来航、進奉船貿易、初期倭寇、蒙古襲来前後の外交交渉、庚寅以来倭寇と倭寇禁圧をめぐる交渉など、日麗関係に関するトピックは一通り取り上げられていると言える。

文献から見る限り、高麗最末期に当たる 14 世紀後半の半世紀を除けば、高麗にとって日本は、政治的にも経済的にもそれほど重要な相手とは意識されていなかったし、日本にとっての高麗もまた同様であった。だが日本の文献史料では、高麗は外交もしくは貿易の相手としてのみではなく、日宋・日元間の航海の目印として、あるいは海難の地としても登場する。当時の日本人にとっての高麗は貿易の地としてよりも¹、むしろ日宋・日元貿易に付随するこうしたイメージの方が強かったと思われる²。

実際に『高麗史』『高麗史節要』などからは、日宋・日元貿易船がしばしば高麗に漂着したことを知ることができる。耽羅が日宋・日元交通の要衝だったことは、当時の史料で繰り返し言及される³が、これは航海の目印、あるいは漂着地としての重要性故と考えられ

¹ 私見では日麗貿易は極めて限定的な機会に、しかも小規模でしか行なわれなかったと考える。詳細は略すが、たとえば 12 世紀中ごろ、太政大臣藤原伊通の手になる『大槐秘抄』の次の一節は、日宋貿易と日麗貿易の規模の差について述べた史料として注目される。

日本の人は対馬の国人高麗にこそ渡候なれ、其も宋人の日本に渡躰にはにぬかたにて、希有の商人のたゞわづかに物もちてわたるにこそ候めれ。

² 中世人の高麗イメージを代表するものとして説話文学を取り上げると、宋・元はしばしば貿易・求法の間として登場するのに対し、日本人が高麗へ渡るのは遁世（『古今著聞集』巻 4、橘正通作文序に述懐の事）・逃亡（『宇治拾遺物語』巻 12-19、宗行郎等射虎事）の場合に限られる。

³ 「済州海外巨鎮、宋商・島倭無時往来」（『高麗史』巻 25、元宗世家、元宗元年 2 月庚子

る。韓国新安沖で発見された新安沈船の存在は、高麗近海が海難の地、あるいは海難の結果漂流・沈没する地であったことを示している。この点については今更指摘するまでもなく、たとえば森克己は耽羅（済州）に注目して、日宋交通の要衝としての位置を明らかにしている [森 1975a 第 21 章（初出 1961）]。

本稿では日宋交通における高麗の位置を確認する史料として、仏教史料、なかんずく日本の渡海僧や中国の渡来僧の関係史料を利用してみたい。彼らは日中間を往来する貿易船に便乗することで国境を越える移動を実現した。伝記史料などに登場するこれらの記事はおおむね簡単なもので、「船で入元した」「帰国して〇〇寺の住持になった」という程度の言及に留まるものが多いが、中には航路や海難に関する記事（特に海難を法力で鎮めたという類の靈験譚）を記すものもある。その中には高麗について触れるものも散見するが、これらは日麗関係史の中でほとんど言及されることはなかった。

日中間を往来した僧侶だけではなく、高麗を目的地とした僧侶の渡航記録も挙げるべきだという意見もあるだろう。それはもっともである。しかし詳考は後に期したいが、数百を誇る入宋僧・入元僧の事例に比して、実は高麗に渡った僧の記録はほとんど皆無に近い。高麗側の史料でわずかな事例を挙げることはできるが、それも微々たるもので、背後に入宋・入元僧に匹敵する規模の往来があったと考えることは不可能である。渡来僧に関して、少なくとも史料に現れる住持クラスの僧に関して、確実な事例はない⁴。

日本史研究者の間で「入宋僧」「入元僧」という歴史用語が一般的であるのに対し、「入麗僧」という用語がほとんど用いられないのも理由はある。当時の日本仏教界では入宋・入元経験の価値が高く評価され、特に 13～14 世紀には中国渡航ブームが沸き起こったのに対し、高麗渡航が注目し値する行為として注目されることは終始なかった。入麗僧がまったく存在しなかったわけではないにもかかわらず、僧伝などでほとんどその形跡を残さないのは、入麗経験が僧侶の事跡として特筆すべきものと考えられていなかったことの反映でもある。11 世紀末から 12 世紀前半の日本における高麗仏教（とその背後にある遼密教）の導入は近年注目されている [上川通夫 2006・横内裕人 2002] が、その時期を除け

条)、「若至耽羅、欲往南宋并日本、海道甚易」(『元高麗紀事』至元 6 年 7 月条)、「世祖既臣服高麗、以耽羅為南宋・日本衝要、亦注意焉」(『元史』卷 208、耽羅伝)。

⁴ 鎌倉期の渡来高麗僧としてしばしば挙げられる了然法明がいるが、これについては再考の必要がある。

ば、日本仏教界の眼はもっぱら中国（一部の者についてはさらにその向こうのインド）へ向けられていた。つまり日本の仏教史料からは、日本僧の意図的な高麗渡航事例を記すものを見出すことができないのである。

2 海難の地としての高麗

以上を踏まえた上で、以下では日中間を往来した僧侶の海難事例を紹介していきたい。これに関しては個別には知られているものもあるが、指摘されていなかったものもなお多く存在する。また指摘済のものも含めて、まとめて紹介されたことは従来なく、ある程度の意味はあるものと思われる。

① 『聖一国師年譜』仁治2年(1241)条に以下のようにある。

五月朔、船出明州（慶元府）定海県。至大洋、風波甚悪、同発三船、二船已没、我船亦将沈者数次。忽有女人現船上、師問曰、「女人今自何処而至」。女曰、「我是八幡大菩薩、故来護師耳」。六月晦、着高麗国耽没羅阿私山下、留滞四日、七月達博多。

円爾は5月朔に明州定海県を出航して帰国の途に就いたが、風波の甚だ悪しきに因り、船団を組んでいた他の二船は沈没してしまい、自らの船も危うく沈没するところを、何とか免れることができた。出航してから約2ヶ月、6月晦日に「高麗国耽没羅阿私山下」に4日間停泊したというから、かなり長期にわたって漂流していたと見られる。

「耽没羅」は耽羅で、阿私山は耽羅近くの小島であろうか。阿私山は『耽羅誌』でも確認できず、後考を待つ。なお『聖一国師年譜』は円爾示寂の1280年に門弟の鉄牛円心が撰し、1417年に円爾法流の岐陽方秀が増補したもの。1322年頃、円爾の法孫虎関師鍊の撰になる『元亨釈書』の巻7、弁円伝にも、ほぼ同文の箇所がある。

② 東大寺戒壇院僧凝然(1240-1321)の発言を称名寺僧湛睿が書き取った金沢文庫所蔵の聖教が、近年高橋秀栄氏によって紹介された〔高橋2007:5〕が、そこには「東大寺戒壇院凝然大徳云、『泉涌寺文栄房入唐之時、逢悪風、被吹寄高麗時、彼国僧語曰、善財童子年齒十三歳許之由、令伝説』云々」とある。文栄房が入宋の折、悪風に逢って高麗に漂着し、高麗僧と問答したことが知られる。高橋氏は文栄房を聞陽房湛海と推定する（「文栄」も「聞陽」も呉音で「もんよう」）。湛海は二度の入宋経験を持ち、『本朝高僧伝』巻58に拠ると、嘉禎(1235-38)の末から1244年の間に在宋し、帰国後再び入宋して1255年に帰国したという。

- ③ 無本覚心示寂（1298）数年後の撰になる『法灯円明国師塔銘』に拠ると、覚心は帰国の途の半ばにして風濤の難に遭ったが、覚心は衆を集めて観音を称念しこれを収め、博多に帰着することができた（『法灯円明国師行実年譜』に拠ると1254年6月上旬）。さらに種々の伝記史料からは知られないが、覚心三十三回忌（1330年）の普説法語に「即泛巨舶回東韓、凡経水陸触物、遇縁種種、神験極多、到本国居高野山、得金剛三昧、復為鷲峰開山」とあり（明極楚俊『明極和尚語録』卷下、建長禅寺語録）、帰国の途次に「東韓」にも立ち寄ったらしい。おそらく漂流の過程で高麗の近くを通過したか予定外に流れ着いて一時的に上陸したものだろう。
- ④ 仏教史料ではないが、『高麗史』卷25、元宗世家、元宗4年（1263）6月条に、「日本官船大使如真等、将入宋求法漂風、僧俗并二百三十人泊開也召島、二百六十五人到群山・楸子二島。大宰府少卿殿白商船七十八人、自宋将還本国、漂風失船、以小船泊宣州加次島。命全羅道按察使、給糧船護送其国」とあり、如真の率いる入宋船が漂流し、乗員が高麗の島々に漂着したことが知られる。
- ⑤ 一山一寧は元の使者として、1299年に慶元から帰国する倭船に乗って日本に向った。『一山国師語録』卷下付収、行記（1321年撰）に「於是乎風浪鼓盪、檣折舵摧、修補僅成、進馳三四日、到高麗絶徼、又速奔一日、出沒涛山浪嶽間、飄簸而著博多」とあり、途次に風浪で帆柱も舵も折れ、わずかに補修を施した上で、3～4日で高麗に到り、さらにそこから1日で博多に着いたという。博多までの日数から考えて、「高麗絶徼」とは慶尚道南岸の辺りであろうか。
- ⑥ 義堂周信（1326-89）『空華集』卷7に「再和酬永侍者、乃師無著有新羅箭之語云」と題する偈がある。義堂が相山良永と和韻したものだが、相山の師である無著良縁に『新羅箭』なる語録があったことが分かる。偈中に「当年誤当新羅箭、添得重重眼裡花、無著真宗端可滅、不伝妙旨豈容差」という一節があり、詳細は不明だが、無著は誤って「新羅箭」に当たったことがあるらしい。無著は1320年代まで20年近く在元したことがあり（『清拙和尚語録』日本4、無著縁首座住西禅など）、玉村竹二氏は、「或は渡元の往路又は復路に朝鮮半島に漂着したのではないかと想像する」とする〔玉村1983: 639〕。
- ⑦ 1717年に成立した『祇陀大智禅師行録并序』に拠ると、大智は1324年に元から帰国する折、高麗に漂着し、高麗王に偈を呈して船を与えられ、加賀宮腰津に着いたという。高麗漂着の典拠は大智門弟の光厳が編した『大智禅師偈頌』に収める「同破船時

呈高麗王」と題す偈であろう。村井章介は、1324年という年代が『広福寺文書』菊池武時寄進状写（『曹洞宗古文書』670）に「去正中元年甲子（1324）、従宋土帰朝」とあることに拠っており、本来は日本に到着した年次に掛かるべきものとする。さらにその上で、元からの出航と高麗漂着は1323年の新安沈船難破と絡むものである可能性も指摘している〔村井 2006〕。なお従来指摘されていないが、『高麗史』巻 35、忠肅王世家、忠肅王 11 年（1324）7 月癸丑条に「倭舶飄風至靈光郡。凡二百二十餘人。具舟楫帰之」とある記事は、繫年が「具舟楫帰之」に係るものだとすれば、大智帰国と同伴かもしれない。

ただし村井は最古の大智伝を『延宝伝灯録』（1678 年成立）とするが、年代だけで言えば、1669 年にまとめられた肥後の地誌『国郡一統志』の巻 2、紫陽山広福禪寺に引用するものの方が古い。

正和三年(1314)、師年二十四、跨海入太元、上名山、訪明師、遍覽日久、経歴尤多。游天冠山華嚴境云、「天冠山聳青螺髻、朶朶千峰疊翠嵐、若見毘盧真境界、善財不走百城南」。宿龍翔真歇堂云、「鳳宿龍巢二百年、空江冷浸月明天、白頭子就黒頭父、一曲新豊続断弦」。

礼育王塏云、「八万四千七宝塏、空山惟有基留（脱アルカ）、黄金骨冷無人葬、日炙風吹百草頭」。

礼天衣塔云、「撐破爺爺没底舩、葛藤椿子倒多年、只留牙齒一具骨、雨竹風松皆説禪」。

師在徑山時、有本邦人、求太元書、乃使師書之、筆法精妙、衆歎服之。入天童山、相伝有語云、「香明峯頂遣舟、揚子江頭走馬」。唐人不知此。大智如浄仏法付属是〔如浄遷化数十年後、師入太元〕。

寓者七年、太元天子詔許還本国。上偈云、「万里北朝宣玉詔、三山東海送帰舩、皇恩至厚将何報、一炷心香祝万年」。

帰泛渤海、遇悪風漂舩于高麗地。時呈一偈云、「曠却飄流生死海、今朝更被業風吹、無端失却帰家路、空望扶桑日出時」。

王下諭留者三年。呈双溪大師、「咫尺却成千里隔、再来相見恐無期、可憐一隻籠中鶴、不放天涯自在飛」。

日本正中元年甲子(1324)、師年三十四而帰。

これに拠ると、大智は 1314 年入元、7 年間在元、高麗漂着、3 年間在麗、1324 年帰国となる。7 年・3 年という滞在年数を足掛けとすると帰国の年代が合わないから、数えて計算すると、元からの出国と高麗漂着は 1321 年のこととなる。おそらく寺伝に拠ったものだろう。

ちなみに『祇陀大智禪師行録并序』は、撰者の某が 1714 年に肥後広福寺を訪れて

集めた資料を元に記したものである⁵。つまり『祇陀大智禪師行録并序』は内容がより豊富であるとはいえ、その主要な情報源は広福寺の寺伝の類で、信頼度の点では『国郡一統志』と変わるところはない。むしろ『国郡一統志』の方が寺伝本来の姿に近いと考えられる⁶。

問題はその寺伝の信憑性だろうが、たとえば『国郡一統志』は大智示寂を 77 歳、1366 年 12 月 10 日とし、大智の法弟天菴懷義が撰した「祭大智禪師文」（『大智禪師逸偈行録』附録）にも、1366 年 12 月 10 日に 77 歳で示寂したことが明記されている。となると生年は 1290 年となるはずだが、『国郡一統志』はこれを 1288 年としている。さらに入元した 1314 年に 24 歳、帰国した 1324 年に 34 歳とするが、『一統志』の 1288 生誕説を採用すればそれぞれ 27 歳・37 歳、正しい生年から計算すればそれぞれ 25 歳・35 歳になるはずである。すなわち『国郡一統志』は、年数に関して同一史料内でも整合性が取れていないことになる。こうした年代への無頓着さは、後世に手が加えられる以前の素朴な寺伝の姿を反映しているのだろうが、年数の記述をただちに信用することについては、いささか躊躇させる。

ただし『祇陀大智禪師行録并序』も大智を 1289 年生、1314 年に 25 歳で入元としており、年代が整合しないことについては同様である（生年の誤りを正せば、年齢自体は正しいが）し、年齢の誤記は中世の信頼度の高い伝記史料でもしばしば見られるものである⁷。ただちに採用すべきとはしないが、とりあえず現状で最古の、近世初期の寺伝の原態を残すと考えられる伝記史料で、大智の高麗漂着が 1321 年とされていることは、ここで指摘しておきたい。

⁵ 「曾正徳甲午春、余省病翁於粉郷、湯薬之暇、偶詣広福。広福者師堂陰也。乃覆之監院、而探古篋、尋断簡、彼此考勘、僅得履歴之彷彿也。仍不揣劣昧、記録梗概矣」。

⁶ なお詳述は避けるが、『日本洞上聯灯録』『大智禪師伝』『大智禪師行業略記』など後続の諸伝は、おおむね『祇陀大智禪師行録并序』に拠っている。

⁷ たとえば龍山徳見示寂（1358）の 2 ヶ月後に友人の中巖円月が撰した行状（『黄龍十世録』所収）には 1349 年帰国とあるが、『園太暦』観応元年 4 月 14 日条に拠れば、1350 年の帰国。また孤峰覚明示寂（1361）翌年に弟子の南州聖珍が撰した『孤峰和尚行実』では、「応長元年辛亥春、歳四十」「大元至大二年」に入元したとあるが、応長元年は 1311 年、孤峰 40 歳は 1310 年、至大 2 年は 1309 年である。

- ⑧ 乾峰士曇『乾峰和尚語録』巻2、悼高麗鬪死僧軸序に、以下のようにある。

嘉暦元年（1326）渡元而來朝之商舶、以碍耽羅灘上横波之石、而有無柴燒無水飲之患焉。越乎相州龜峯遠上人、卒其衆七十士、高麗原上、以樵以汲。彼島居卉服之仇、濫誤疑混戰而為害矣。遠也中弩而死也。麗之県令、以事聞于大元皇帝、帝詔理于舟楫。実以宿春之糧送、逃（？）之士五千餘輩、得再帰乎。

1326年に元に渡り帰路に就いた船が耽羅で座礁し、上陸したところ、島民と戦闘になり、遠上人をはじめとして死者も出た。高麗の「県令」（済州牧司か）は元の皇帝に連絡し、皇帝の命で船や食料を与えられ、帰国が叶ったという。『乾峰和尚語録』巻3、祭宝都寺に、「飄墮高麗、困苦旅征、命瀕九死、痛入無声、…大元帝者、仁風遠行、官船津送、再還故城」とあるのも、恐らく同伴だろう。

なお『高麗史』巻30、忠烈王世家、忠烈王18年10月庚寅条に引く1292年の日本宛の高麗国書には、「今年五月、貴国商船到泊耽羅州渚。耽羅性頑頡、射逐其船、邏捉二名而送之。小邦申於大元国、皇帝詔問其由、命還本国而護送」とあり、耽羅漂着の日本船の件が（おそらく耽羅から高麗へ連絡されて）高麗から元に伝えられ、皇帝の命によって送還されている。元服属期、外交に関する決定権を元に握られていた高麗は、漂着船の処置について元の指示を仰がねばならなかったと考えられる。1326年の倭船漂着が耽羅の「県令」から（おそらく高麗を経て）皇帝に連絡され、皇帝の命で送還されたのも、同様の措置と考えて良いだろう。

- ⑨ 『古林清茂禅師拾遺偈頌』送海東曇侍者入浙は、日本僧寂曇が浙江に向う際に元僧古林清茂が与えた送別偈だが、竺仙梵僊がこれに付けた按語に、竺仙が鎌倉浄妙寺住持の頃（1332-34）に寂曇から聞いたこととして、「所得古林和尚法句、至高麗失之」と記される。寂曇は持っていた元僧古林清茂の法句（＝送海東曇侍者入浙）の実物を高麗で無くしてしまったという。寂曇が元から帰国する間に高麗に寄ったことが知られるが、その際に大切な送別偈を無くしたというのは、何らかの事故があった可能性を示唆する。他の事例を参照するに、漂流だった可能性が高いだろう。なお古林清茂は1329年に示寂したから、寂曇は1320年代以前に入元したものだだろう。
- ⑩ 南海宝洲は1342年に中巖円月とともに入元を試みたが、官司の制止に遭い果たせなかった。その後20餘歳の時（南海は1321年生だから、1340年代）、「同志十餘輩」とともに入元を図ったが、船は急風に煽られ転覆し、高麗に漂着した。南海弟子の中叟良鑑撰『南海和尚伝』を『諸祖行実』巻下より引用する（『禅林僧伝』巻4と対校）。

二十餘歳（「載」）、而結同志十餘輩、而再乘南渡之舶、中流風急、而俄值覆舟之患、有一大函、浮水上渡之、終得三韓之地。如有神助也。師登海岸暫憩、日將三竿、見龐眉皓首老僧着金縷衣持經負暄坐岩上、行而欲誥、俄而失所在也云々。從茲歸本邦。

南海の「同志十餘輩」に含まれると思われるのが、如聞上座・玄瓊侍者である。1345年竺仙梵僊撰の「刊古林和尚拾遺偈頌緒」（『古林清茂禪師拾遺偈頌』）に拠れば、彼らは入元しようとして高麗の耽羅に漂着し、そこで古林清茂の偈頌をまとめた巨冊を入手した。

小師海寿（椿庭海寿）侍者、一日携巨冊、謂余曰、「昨有如聞上座者。欲南詢、乃附舶而去、飄風至耽羅。舶破之、逗留高麗。高麗人問其故、乃出一巨編以示、則皆古林和尚所作、中間唯略問東山空和尚者一二耳。聞乃録之、以為得至宝而歸…」。…後玄瓊侍者、自九州來見之曰、「某与如聞同志。於高麗獲此本也。奈何不即開版耶」。

南海と玄瓊はともに1342年に天龍寺船で入元を希望し、竺仙梵僊から送別偈を送られている（『竺仙和尚語録』巻中、竺仙和尚偈頌、洲侍者・浄智瓊侍者）。両者は同様の経歴をたどっており、その入元計画・高麗（耽羅）漂着は同伴と見て良さそうである。

- ⑪ 『愚中和尚語録』巻6、年譜に拠ると、愚中周及は1351年3月に慶元を発し、帰国の途に就いたが、そこで風波が荒れ、帆柱は傾き舵は折れる有様だった。しかし北野天神の加護で、4月には博多に帰ることが出来たという。この件について、年譜編者の一笑禪慶の手になる年譜注釈書『愚中周及年譜抄』（1426年撰）の巻下には、

忽到高麗界、舟師等悼惶曰、「此处有惡石、船必觸破。奈何々々」。予以前夜所感、告諭船中、專念天神。船去岸数丈、順風吹轉、波涛漸恬、遂得安穩。

とあり、高麗近くまで漂流したが、岸に至ることはなかったこと、高麗の近くは座礁しやすく危険な場所と認識されていたことが分かる。厳密には14世紀後半に属するが、興味深い事例なので挙げておく。

以上、管見に入った11の事例を挙げた。これらの内、③⑤⑥⑨の上陸の有無はよく分からないが、⑪は上陸しておらず、他の6例は上陸している。上陸した6例中、②⑦は漂着地不明（ただし⑦は『高麗史』の記事との同定が認められれば靈光郡）、他の4例は島への漂着であることが知られ、その内④以外の3例は耽羅に上陸している。『高麗史』に

見える 1244 年・92 年の耽羅漂着事例⁸も含めれば、耽羅漂着の確率の高さが知られよう。

⑧⑩を見ると、高麗が目的地となっていないことはもちろんのこと、座礁の恐れのある危険な場所としても認識されていたことが分かる。高麗沿岸は、西は遠浅、南は多島海で構成され、難所が多い。特に耽羅は火山島で海岸は岩礁に囲まれており、日中貿易に用いられた巨大なジャンクが容易に入ることができる場所ではない。朝鮮王朝時代にも、耽羅は天然の要害に守られた、外来船からすれば危険な島とされ、倭寇の被害も少なかった[藤田明良 2001: 42]。もちろん着岸可能な港や航行可能な海域は点在するが、その利用に当たっては詳細な地理に関する知識が必須であり、日中間を往来する海商にとって、特に舵が効かない状態で高麗に着岸することは、極めて危険な行為だった。

自然条件だけではない。商船が無事耽羅に着岸できたとしても、その後には島民による襲撃の恐れがあった。『今昔物語集』巻 31-12、鎮西人至度羅嶋語にある説話に、次のようなものがある。鎮西の人が外国で商売をして帰国した際、鎮西の西南に大きな島があったので、上陸して食料などを調達した。船員が帰国後にその話をしたところ、そこは度羅という人食いの島で、事情を知らずに行けば、人が集まってきて捕らえられ食われるということを、老人から教えられたという。「度羅」は耽羅が転訛したものだろうが、虎＝人食いとも掛けているのだろう。

耽羅人の人食い説は、同じく『今昔物語集』に人食いの島として登場する羅刹国(巻 5-1)や、円珍の入唐体験談に基づく人食いの島としての琉球(『園城寺文書』1-42、円珍奏状案など)のイメージが投影されている可能性がある。しかしそのイメージは必ずしも偏見のみに基づくものではなく、前提として危険な島としての実態もあつたに違いない。⑧からは船が耽羅で座礁したため、柴や水を採るために上陸したところ、島民に襲撃されて死亡した僧侶の存在が知られる。また地方官の私掠の対象となる可能性も高かった。たとえば濟州副使盧孝貞・判官李班は、在任中に漂着した日本商船から私に綾・絹・銀・珠などを奪ったことが発覚し、1244 年に処罰された⁹。これはたまたま発覚した場合であり、発覚しない場合も多かったに違いない。さらに高麗の島民が自ら海に出て日元貿易船を襲撃するケースすら存在した¹⁰。

⁸ 巻 23、高宗世家、高宗 31 年 2 月癸酉条・巻 30、忠烈王世家、忠烈王 18 年 10 月庚寅条。

⁹ 『高麗史』巻 25、高宗世家、高宗 31 年 2 月癸酉条。

¹⁰ 『元史』巻 42、順帝本紀、至正 12 年 8 月丁未条。

もつとも『今昔物語集』の説話で、現地の事情を知らない（「案内不知ズ」）と危険だというのは、安全な場所も存在したことを示唆しているのかもしれない。だが少なくともこの説話に登場する海商は、現地の事情に通じていなかった。また漂流や座礁によって、予定外でも危険を承知の上で上陸せざるを得ない場合も往々にしてあった。

さらにこれは耽羅に限らないが、仮に無事に着岸できたとしても、国家的な襲撃・拿捕の可能性もあった。初期倭寇の活動によってとばっちりを受けて焼き討ちされた商船が存在した¹¹し、日元関係が緊張している時期には、日本船は高麗で拿捕の対象だった¹²。

少なくとも「宝の山」を積んだ巨大なジャンクにとって、高麗、特に耽羅は自然の面でも人災の面でも危険極まりない土地であった。前期倭寇活動期や朝鮮王朝前期において、耽羅と倭寇の関係や耽羅人の海上活動は注目されているが、これは小回りが利く小規模な船で島伝いに活動する海民たち（海賊にも通じる）の世界に関してであって、日本の権門や中国の巨商の出資・経営の下で大規模な貿易に従事する海商たちとは、世界を異にしていたといえよう。

3 航海の目印としての高麗

日宋・日元貿易に従事する海商たちにとって、高麗、特に耽羅は危険な土地として認識されていた。しかし一方で、耽羅は一様にネガティブなイメージでのみとらえられていたわけではない。近づけば座礁し上陸すれば襲われる土地だが、遠くから見る分には、格好の目印である。

8世紀以前の日本が海外から文物や文化を導入する際は、おおむね東シナ海を直航せずに朝鮮半島沿岸を経由した。日本から朝鮮半島へ向う際には、玄界灘という難所が控えており、決して安全な航路というわけではなかったが、東シナ海と違って行き先を見ながら島伝いに航海ができるという地理的条件から、素朴な航海技術で乗り越えることも可能だ

¹¹ 藤原定家『明月記』嘉禄2年（1227）10月16日条。

¹² 一例を挙げれば『高麗史』巻30、忠烈王世家、忠烈王19（1293）年7月丁丑条に、「鎮辺万戸韓希愈、捕漂風倭八人來」とある。この時は前年の元・高麗の牒状送付によって、日元間が緊張していた時期だった〔榎本渉 2006: 244〕。先述したように、漂着船の処置は元が決定したから、日元関係が緊張していた時期には高麗漂着倭人は送還されず元へ送られたものと見られる。

った。これに対して9世紀半ばに始まる東シナ海直航ルートは、最短距離を通っても平戸・五島列島から舟山群島まで数日から2週間程度を要し、対岸を見ながら航海することは不可能である。しかも東シナ海は黄海と異なり波も荒く、危険も多い。宋海商は海の色・深さなどの経験的知識や、風向き・星の運行・羅針盤など科学的知識を駆使してこの問題を乗り越えたわけだが、危険であることには変わりなかった。ここで平戸・五島列島よりも西に位置する（中国に近い）耽羅が、航路上の目印として重要な意味を持つてくる。

耽羅を航海の目印としたことが明確に知られるのは、11世紀後期の入宋僧成尋・戒覚の日記である。成尋は1072年3月19日、肥前壁島で宋船に乗って入宋の途次に就き、翌日北方に耽羅を見た。『参天台五臺山記』延久4年3月20日条に、「午時、北過高麗国耽羅山」とある。戒覚は1082年9月5日、博多で宋船に乗って入宋の途に就いた。その船は筑前北崎浦を経由して肥前上部（壁）島に到り、14日に出航、16日に託羅（托羅＝耽羅）を見た。その旅行記『渡宋記』永保2年9月16日条に「夜至五更、過託羅山。是高麗国之別嶋也」とある。ただしいずれも、耽羅に上陸していないことは注意すべきであろう。島外の人間にとって耽羅は人食いの危険な島であり、近づいてはいけない島だった。

現存する入宋僧の日記は上記二点のみで、入元僧の日記は現存しない。膨大な伝記史料にも、目印としての耽羅を語る記事はほとんど登場しない。ただし成尋・戒覚の事例を見るに、耽羅南岸を通過するのは順調な航海の過程でのことであつた。これは海難などのアクシデントと異なり、敢えて伝記に記録する必要もないことであり、実際には他の航海でも一般的に、耽羅南岸を目印としていたものと思われる。

航海中に高麗近海を通つたことを記す伝記史料で、前章で挙げなかったものに、渡来僧清拙正澄が1326年に来日した時の例（建長寺船〔柴謙太郎1932〕）がある。『禅居附録』大鑑禅師舍利塔銘并序（1344年撰）に「舟由高麗、遭風涛变、師惟長哦自若、以安衆心、天為開霄」とある。細部までその記述を信じるとすれば、高麗に来てから暴風に遭つたように読める。

一方『清拙和尚語録』付収、大鑑禅師塔銘（1360年代前半撰）には「間游耽羅・高麗・新羅等諸国」とあり、清拙が高麗にも立ち寄つたように見える。ところが塔銘のこの部分には「有題詠、載別録」と注記されており、清拙の詩が典拠となっていることが分かる。これは清拙の詩文集『禅居集』に収める「東海游」と題する詩のことで、それには「丙寅（1326）六月歳泰定、吾道自此行東之、平生胸次小瀛渤、長風巨艦共遨嬉、耽羅高麗在吾東、扶桑日本至可期」とある。これを見ると清拙は高麗に上陸したわけではなく、高麗の

傍を通ったということのようである。

清拙が高麗に関して詠んだ詩はもう一つある。『清拙和尚語録』巻2、望礼耽羅尊者という詩である。

稽首耽羅古応真、海天孤島浄無塵、二千年上空諸有、十八尊中第六身、宴座珠林雲意
静、経行宝石月華新、龍宮見説多嘉集、応笑拈髄舐指人。

詩の題から、清拙が「耽羅尊者」を望礼したことが知られる。「望礼」というからには、遠くから遥拝したのである。詩中では、「耽羅尊者」は「耽羅古応身」と言い換えられ、また「十八尊中第六身」とあることから、それは十八羅漢の第六尊者だったことが分かる（応身は羅漢のこと）。当時耽羅には羅漢がいたと考えられていたのである。

清拙の乗った建長寺船は、往路の1325年にもやはり耽羅の傍を通過していた。これに乗って入元した中巖円月は、以下のような詩を詠んでいる¹³。

…將過白水洋、暮到耽羅垂、挙手揖尊者、相望隔淙漪、緬想徐生舶、満載童草児、蓬
萊在何許、采芝食其蕤、回首顧三韓、山勢張差池、敢近九龍潭、遠拒渦漩危、桂林護
流求、遼水縈高麗、轆轤万里間、一日視平陂、碇泊昌国東、珠玉走相追、時予辞海賈、
抽身往南嶽、誓言得道後、帰国化庶黎、…。

これに拠ると中巖は、耽羅の傍を通過した時、船上で尊者に揖した（お辞儀した）らしい。

さらにもう一例、嵩山居中の例を挙げよう。嵩山の詩文集『嵩山集』巻3に収める「阻汎於長門赤間関数日、其間謾作数偈云」と題する8首の詩は、嵩山が日本へ帰国して赤間関に滞在している間に作ったものである。その内の一首目には「多日漂流巨海間、歴過三島到三韓、帰今把断要津看、高聳金鰲肖上山」とあり、嵩山が高麗（の沿岸か）を経由してきたことが知られる。

そして『嵩山集』で、この直前に収める「船上拙唱」なる詩には、

多載南詢未尽心、一朝東帰究玄津、宝陀岩上対開士、耽没羅州遇応真。

とある。何年間も元で遊方した後、帰国の途についたが、宝陀（舟山群島の普陀山で、観音菩薩の聖地）では開士（菩薩）に對面し、耽羅では応真（羅漢）に会ったという。『延宝伝灯録』巻22に拠ると、嵩山は二度入元し、一度目は1309年に入元してまもなく帰国¹⁴、

¹³ 中巖円月『東海一漚集』1-2、和儀則堂韻謝琳荊山諸兄見留。

¹⁴ おそらく同年の至大「倭寇」後の混乱を避けたものであろう〔榎本渉2007第2部第1章:124（初出2001）〕。

二度目は 1318 年に入元して 1323 年に帰国した。「船上拙唱」の詩は、「多載南詢」（何年間も元で遊方した）という表現から見て短期に終わった一度目ではなく、二度目の帰国＝1323 年のものだろう。

詳細は知られないが、中巖・嵩山が見た耽羅の尊者・応真は、清拙が遥拝した羅漢に他なるまい。従来指摘されていなかったが、嵩山の詩にあるように、耽羅の羅漢は航海神として信仰を集めた普陀山の観音菩薩と並び称せられ、特に 1320 年代頃には航海中の商船から崇拝の対象とされていたのである¹⁵。

清拙の詩では、耽羅にいると見なされたのは十八羅漢中の第六尊者である。これは跋陀羅尊者に当たる。跋陀羅について玄奘訳の『大阿羅漢難提蜜多羅所說法住記』は、「第六尊者与自眷属九百阿羅漢、多分住在耽没羅洲」と記し、眷属の 900 人の羅漢とともに耽没羅に住んだと記す。

ただし十六羅漢（後にこれに二羅漢を加えたのが十八羅漢）は、歴史的に見れば首座の賓頭盧を中心に派生し、仏教的世界観における四大洲に各四人の羅漢を配して十六としたものであって、賓頭盧以外は必ずしも実体を伴うものではない[小林太市郎 1974 第 11 章]。そもそも跋陀羅の住处耽没羅はインドの仏典に登場する地名の漢字による音写であり、十六羅漢の構想がインド・セイロンの地で作り上げられたことを考えても、耽没羅が高麗の耽羅ではないことは明らかだが、おそらく当時両者は混同され、耽羅を跋陀羅の住した地とする説が生まれたのだろう。日本の仏教史料が耽羅を「耽没羅」と記す（たとえば前章①所引『聖一国師年譜』や、前掲『嵩山集』巻 3、船上拙唱）のは、この説を前提としていると考えられる。

この跋陀羅尊者と関係しそうな寺がある。『新增東国輿地勝覧』巻 38、濟州の非増補部分（1481 年撰）に見える尊者庵である。「在漢拏山西嶺」と記され、耽羅中央に聳える漢

¹⁵ なお航海安全祈願に関して羅漢が登場することはあまりないが、無本覺心が 1254 年に帰国のために乗った船が風波に巻き込まれた時のこととして、『法灯円明国師之縁起』が次のように記すのは、海難と羅漢の関係を示す貴重な事例である。

師從宋朝、大般若經一部・木像羅漢二十体、有所持。此風難之時、沈般若一二帙、獻于龍宮、於日本摺続之。全函六百卷在当寺焉。羅漢者、皆如生身人、奔迴避風波難。依是船頭智定法眼、奉乞一躰、為船中鎮護。此一体、令吾朝仏工造之、得二十躰全数、而安座於当寺円通閣上矣。

拏山の西側に位置した。1651年撰の『耽羅誌』仏宇、尊者庵に、「旧在漢拏山瀛室。…今移西麓外十里許」とあり、もとあった場所は瀛室と呼ばれ(現在のボルレ岳南斜面に所在)、ある時期にそこから西方に十里移動したことが分かる。創建年代は不明だが、1993～94年に瀛室付近で高麗時代の尊者庵跡が発掘されており、その遺物の一部や遺跡の写真は、済州踏査の折に国立済州博物館の展示で拝見することができた。名称の由来は不明だが、跋陀羅尊者の住処に仮託された寺だった可能性が高いように思われる。以下に述べる五百羅漢の存在も、その推定を補強するものであろう。『増補耽羅誌』巻3、仏宇、尊者庵所引の金浄『重修記』¹⁶は耽羅始祖の三姓の時代に遡るとしており、耽羅を代表する古刹だったことは間違いない。

尊者庵跡地の瀛室について、『増補耽羅誌』巻1、山川、瀛室に「或称靈谷、一名千仏峯、一名五百將軍洞。在尊者東十里」とあり、千仏峯とも五百將軍洞とも呼ばれたことが知られる。『新增東国輿地勝覽』巻38、済州、尊者庵に「其洞有石、如僧行道状。諺伝修行洞」とあるものと同じようで、僧侶の姿に見える奇巖だった。「修行洞」とも呼んだとあるが、『大東輿地図』で漢拏山のすぐ西南のところにある「修行窟」と同じものだろう。また『増補耽羅誌』巻1、山川、瀛室に引く『随録』に「五百羅漢列於巖上」とあり、五百羅漢に見立てる説もあったことが知られる。ここは現在の地図では「瑩室奇巖」(韓国観光公社発行『済州中文観光団地地図])、「靈室奇岩」(『韓国道路地図』中央地図、1987年初版発行)と表記され、「五百羅漢」として景勝地となっている(なお「瀛室」「瑩室」「靈室」は音通)。

「五百將軍祠」の称は500という数字から見て、五百羅漢説が変化したものであろう。さらに憶測をたくましくすれば、五百羅漢や千仏峯の称は、跋陀羅が引き連れたという900人の眷属との関係も想定できるかもしれない。

以上をまとめると、耽羅は跋陀羅尊者が住した島とされており、その中央に聳える漢拏山の西側に当たる瀛室には五百羅漢に見立てられた奇巖が立ち並び、跋陀羅ゆかりの寺とされたと思しき尊者庵があった。耽羅は平坦な島で、中央の漢拏山周辺だけが盛り上がる形をしている。また瀛室は漢拏山の西側に位置するが、南北方向で言うと南側に向いている。つまり船が耽羅の南を通る場合、漢拏山南側に当たる瀛室付近が最初に見えてくるこ

¹⁶ 金浄は1519年の己卯士禍で失脚した官人で、『冲庵先生年譜』に拠ると、1520年に済州に配流され、1521年に死を賜った。『重修記』は済州滞在中の1520-21年の作だろう。ちなみに重修記は、金浄『冲庵先生集』には未収。

とになる。航海する者にとって、ここは重要なポイントとなったであろう。これを踏まえると清拙らが遙拝した「尊者」とは、直接には瀛室の尊者庵、もしくは奇巖を指す可能性が高い。

ちなみに『増補耽羅誌』巻1、山川、瀛室所引『南溟小乗』には、「奇巖、人立於水辺・山上者、無慮千百洞之、得号以此」とある。意味が取りづらいが、人が水辺や山上に立てば無慮千百の洞が見え、これを奇巖と呼んでいるということだろうか。瀛室の奇巖は海岸からも見ることが出来たらしい。もっとも海岸を離れた場合にどの範囲で奇巖を目視できるかは未確認だし、その範囲は天候にも左右される。清拙らが奇巖を確認した上で遙拝した可能性もあるものの、羅漢の住处があるという知識を前提に、目の前の漢拏山全体を聖地として遙拝した可能性も考えておいた方が安全かもしれない。

以上が認められるとすれば、耽羅の漢拏山は羅漢の住处として、航海中に遙拝される存在だった。もっとも耽羅が羅漢の住处であるというのは、いかにも仏典による後付けの説明である。漢拏山が遙拝の対象とされたのは、根本的には航海の目印としての重要性故に海商によって航海神としての性格が付与されたためと考えるべきだろう。それはあたかも、日宋・麗宋交通において重要な寄港地だった舟山群島の普陀山が、航海神観音菩薩の聖地である補陀落迦山に同定されたことと比せらるべきものといえる。

ちなみに耽羅の広壤堂は、漢拏山神の弟とされる漢拏護国神を祀るが、『新增東国輿地勝覽』巻38、濟州、祠廟は、胡宗朝（高麗に仕えた宋人胡宗旦がモデル）が耽羅を鎮めに来た時、漢拏護国神が風を吹かせてその船を沈めてしまったという伝承を載せている〔藤田明良 2001: 32〕。これは航海神としての漢拏山の属性を反映したものかもしれない。

なお耽羅尊者遙拝の事例は、3例とも1320年代半ばという限られた時期に集中する。これを何らかの実態を反映したものと見て、1320年代のみに行なわれたものと見るのか、時期的な偏在を史料上の偶然と考えるのかで、評価は大きく変化するだろう。この点についてはなお成案を得ない。今後の課題としたい。

最後に挙げておきたいものがある。『耽羅誌』仏宇、尊者庵に引く李慶億の詩である。

尊者知名寺、荒涼半旧墟、千年孤塔在、一室数椽餘、海客經過少、蛮僧礼法疎、秋宵望南極、塵慮已全除。

17世紀のものだが、ここでは寺が衰えている様を「海客經過すること少なく、蛮僧礼法すること疎し」と表現していることに注目したい。確認はできないが、おそらくかつて繁栄していた頃の尊者庵が、海客が経過し蛮僧が礼法する寺だったという故事を踏まえている

のではないだろうか。

さらにおまけを一つ。『朝鮮成宗実録』成宗 15 年（1484）4 月庚午条に、日本国大智賀島（五島列島福江島）守護兼尾州太守源幡らが朝鮮に済州の漂流船を送還した記事が見える。そこに引用される源幡書契の節文に拠ると、1483 年 10 月 15 日、済州尊者寺住持斯湜らが便船を得てソウルへ向おうとしたが、福江に漂着したので、送還してきたという。ここに見える済州尊者寺は尊者庵に違いない。尊者庵は漂流という偶然的な事情で、15 世紀末にも日本と縁を持つことになったのである。

終わりに

本稿は 10 世紀～14 世紀前半の日宋・日元交通における高麗の位置を確認することを目的とした。その中での結論は、①高麗は危険な海難の地であった、②高麗は日宋・日元交通における航海の目印であった、という二点である。常識的な結論ではあるが、当該期の高麗の海上世界について、日本の仏教史料から具体的な事例で肉付けが出来たという点は、一定の成果であると思う。特に日宋交通の要衝と言われた耽羅を主語にしてまとめると、耽羅は一つに現実の危険性から、一つにはその危険性のイメージが増幅した結果として、海商や渡海僧からは、海難の島・人食いの島として恐れられた。しかし耽羅は同時に、航海においては貴重な航海の目印であり、海商・渡海僧にとっては、航海の無事を確認できる安堵の島でもあった。耽羅に対するそのような思いこそが、航海安全を守ってくれる羅漢の島としての耽羅のイメージを作り上げたのだろう。

ただし仏教史料からうかがえるのは、僧侶が便乗した大規模なジャンク船による往来に関するものであり、こうした世界が全てだったわけではない。偶然的な廻船の漂流の他、漁民・海賊の越境行為は当然想定される。彼らの中には日本・中国から高麗近海を往来するだけの航海知識や人脈を有する者もいたかもしれない。そうした個々で見ると小規模な海民の活動が、日本の南北朝内乱や中国の元末内乱によって抑えを失った結果、海上を揺るがす大きな動きとして爆発するのが 1350 年の前期倭寇であり、彼らは 15 世紀の東シナ海を構成する主役の一つに躍り出ることになる。高麗末期から朝鮮前期の東シナ海海民の世界はすでに注目されて久しいが、その萌芽は 14 世紀前半以前からあっただろう [藤田明良 1997]。仏教史料から高麗のイメージを見る場合、このことは自覚する必要がある。

なお 14 世紀後半になると、高麗の元からの自立を受け、倭寇問題をめぐる日麗交渉（相手は室町幕府だけではなく、九州探題・大内氏・宗氏なども含む）の中で、主に外交僧を

通じた日麗間の人的交流が活発化し、仏教史料における高麗関係記事は増加する。この時期の日麗交渉に関しては研究も多く、改めて言及する必要もないと思われるが、高麗文人と日本僧との詩文の応酬に関しては李鍾黙氏がまとめている [李 2002] ので、ご参照願いたい。

<引用文献>

- ・ 青山公亮 1955『日麗交渉史の研究』明治大学文学部研究報告
- ・ 稲葉岩吉 1935「日麗関係」『岩波講座日本歴史』岩波書店
- ・ 榎本渉 2006「初期日元貿易と人的交流」『長江流域の宋代—社会経済史の視点から—』汲古書院
- ・ 同 2007『東アジア海域と日中交流—9～14世紀—』吉川弘文館
- ・ 上川通夫 2006「日本中世仏教の成立」『日本史研究』522
- ・ 小林太市郎 1974『小林太市郎著作集』3、中国藝術論篇 I、禅月大師の生涯と藝術、淡交社
- ・ 柴謙太郎 1932「鎌倉幕府の遣外建長寺船について」『歴史地理』59-4
- ・ 高橋秀栄 2007「泉涌寺出身の律僧たち—金沢文庫の聖教を手がかりに—」『戒律文化』5
- ・ 玉村竹二 1983『五山禅僧伝記集成』講談社
- ・ 藤田明良 1997「「蘭秀山の乱」と東アジアの海域世界—14世紀の舟山群島と高麗・日本—」『歴史学研究』698
- ・ 同 2001「高麗・朝鮮前期の海域交流と濟州島」『青丘学術論叢』19
- ・ 村井章介 2006「大智は新安沈船の乗客か」『日本歴史』694
- ・ 森克己 1975a『続日宋貿易の研究』国書刊行会
- ・ 同 1975b『続々日宋貿易の研究』国書刊行会
- ・ 横内裕人 2002「高麗統蔵経と中世日本—院政期の東アジア世界観—」『仏教史学研究』45-1
- ・ 李鍾黙（桑嶋里枝訳）2002「朝鮮前期韓日文学交流の様相について」『朝鮮学報』182
- ・ 李領 1999『倭寇と日麗関係史』東京大学出版会

中世港湾都市遺跡の立地・環境に関する日韓比較研究

平成20年3月17日 印刷

平成20年3月17日 発行

代表 村井章介

発行 東京大学大学院人文社会系研究科
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

印刷・製本 凸版印刷株式会社
東京都板橋区志村1-11-1
